

主 論 文 要 旨

論文提出者氏名：神山 昌也

専攻分野：神経精神科学

指導教授：古茶 大樹

主論文の題目：

大学病院精神科における高齢発症患者の在院日数に影響する因子の検討

共著者：

三宅 誕実、戸邊 友揮、安藤 久美子、古茶 大樹

緒言

近年、本邦では急速な高齢化を迎え、精神科全入院患者数の半数以上を65歳以上の高齢者が占めている。こうした現状において、高齢患者の入院治療に要する期間は医療経済的な側面からも重大な関心事といえる。高齢者は加齢による自らの変化や喪失体験に適応するという特有の心理社会的課題を抱えており、在院日数長期化に影響することが推測されてきた。国内では老年期や高齢発症のうつ病の入院長期化に関して良く調べられている。しかし、うつ病以外の内因性精神疾患を含む検討はなされていない。そこで本研究では、高齢者の非器質性精神障害について、在院日数に影響する因子を広く検討することを目的とした。

方法・対象

当科入院診療録を用いて、入院患者の身体的背景、社会的背景、発症前ライフイベント、症候、治療方法等のデータを抽出し、後方視的に解析を行った。組み入れ基準は、2018年1月から2019年12月までの2年間に当院での入院治療を受けた症例、入院時年齢が65歳以上、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition (以下DSM-5)の「統合失調症スペクトラム障害群および他の精神病性障害群」、「双極性障害及び関連障害群」、「抑うつ障害群」のいずれかの診断に該当するものとした。除外基準は、DSM-5による「認知症」の診断が併存するもの、「物質関連障害および嗜癖性障害群」に含まれる診断が併存するもの、入院の主目的が身体疾患の治療であるもの、死亡退院となった者とした。調査変数として、発症年齢、性別、入院形態、独居、身体合併症、診断、精神病症状、抑うつエピソード、躁病エピソード、病識、希死念慮、自身の健康喪失、家族の健康喪失、転居、死別を挙げ、主要評価項目である在院日数を従属変数として、調査変数それぞれについてMann-Whitney検定による単変量解析を行った。そして、単変量解析の結果有意差を認めた因子を独立変数として、ステップワイズ法で変数選択を行い、重回帰分析による多変量解析を行った。すべての検定で有意水準は5%水準を用いた。

なお本研究は、聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会(承認4790号)の承認を得たものである。

結果

組み入れ基準、除外基準に従って101名が解析対象となった。単変量解析の結果、発症年齢が60歳以上の群では、60歳未満の群と比較して有意に在院日数が延長していた($p=0.009$)。医療保護入院は任意入院と比較して有意に在院日数が延長していた($p=0.008$)。女性は男性と比較して有意に在院日数が延長していた($p=0.049$)。本研究では、入院時年齢、診断、独居、身体合併症については有意な差を得られなかった。全

体の約6割が精神病症状を有していた。精神病症状を有する群では、有さない群と比較して有意に在院日数が延長していた($p=0.031$)。病識のない群では、ある群と比較して有意に在院日数が延長していた($p=0.02$)。全体の7割がうつ病の診断であり、全体の約3割が入院時に希死念慮を有していた。希死念慮を有する群では、有さない群と比較して有意に在院日数が延長していた($p=0.01$)。家族の健康喪失を有する群は、有さない群と比較して有意に在院日数が延長していた($p=0.032$)。多変量解析の結果、在院日数に影響を与える因子として、発症年齢、入院形態、性別、精神病症状、希死念慮、病識、家族の健康喪失の7項目を投入したステップワイズ法による変数選択の後、重回帰分析を行った結果、希死念慮があること、発症年齢が高齢であることが独立変数として組み込まれた。希死念慮の標準化係数は0.297、 R^2 は9.9%、発症年齢の標準化係数は0.202、 R^2 は13%であった。

考察

本研究では、75歳以上が半数を占め、約7割が身体合併症を、約6割が精神病症状を有していた。本研究では組み入れ基準にDSMを用いており、機能の全体的評定(Global Assessment of Functioning; GAF)尺度を重症度判定に使用している。精神病症状に該当するような幻覚や妄想に言動が相当影響されるものは、GAF尺度30点以下であり重症と判断していることから、大学病院閉鎖病棟として高齢入院患者の重症度は高かったといえる。その中で、重回帰分析の結果、決定係数は10%前後と当てはまりは低いものの、高齢発症患者の入院長期化には、希死念慮のみが影響する可能性が示唆された。希死念慮を訴えた高齢者はよりうつ病の重症度が高いことを報告されており、また、入院後のうつ病評価尺度の得点が高い(重症化する)ほど老年期うつ病の入院長期化に影響することが示唆されていることから、重症化に影響を及ぼす希死念慮は、入院長期化にも影響する可能性が高い。本研究対象は7割がうつ

病の診断であり、全体の約 3 割が入院時に希死念慮を有していたことが、在院日数の長期化に影響した可能性がある。また、精神科入院患者についての複数のシステマティックレビューを参照すると、高齢者の在院日数延長には、生活環境の影響が指摘されている。高齢発症の場合、家族の疾患受け入れといった心理的側面および、退院後の施設入所や住宅設備導入といった社会的側面において大きな変化を要するため、在院日数が長期化しやすいものと考えられる。